

文苑



静

高安 月郊

君と芳野に別れしは
 雪の花ちる冬の暮
 今は櫻の雪香ふ
 風は我身の春ならず
 君はいづくにおはすらん
 雁も通ふかみちのくの
 空にかいやく朝日かけ
 あはれ一雨降れかし
 雨は我身のなかだちや
 神泉苑にまみえしも
 堀川御所にはべりしも
 雨はなさけを添へけるに



露も散らして鶴か岡
 戀もなげきも白拍子
 誰に示さん一さしを
 神をかことに舞へとは
 幕を伺ふ鎌倉の
 殿は我身の仇ぞかし
 打てや鼓もつはものゝ
 はやしにさらば舞ふべし
 廊に溢るゝ阪東の
 武者は雲とも寄りて見よ
 かざす扇はたをやめの
 静が胸のつるぎぞや

弓矢の神も見そなはせ

判官殿も聞こしめせ

君のかたきを今こそと

思ひのまゝに歌はん

しづやしづ賤の小手巻くりかへし

昔を今になすよしもかな

貧女嘆

東くめ子

軒端の松に風絶えて

日影に騒く晝の塵

泣なみむつかりし兒は寝たり いさ此暇に急かなん

あはれ世にある人々は 青葉涼しき山々に

白波よする浦々に 己がむきく遊ふてふ

此うす絹のなつ衣、 我物ならば嬉しきを

流るゝ汗に汚さじと 心して縫ふ苦しさよ

貴女怨

同人

夕顔棚の下涼

おのが儘なる樂は

賤か伏家にありとかや世をしら玉の小簾の中

身にはうすもの纏へとも手には扇を離さねど

熱き涙のこぼるゝは 冷き人を怨むなり

庭には清水流れつゝ 涼しき風は通へども

胸の思はたきものゝ かやりと燃ゆる夏の暮

夏夜

平もと子

故郷に通ふ夢路の浮橋を

渡りあへぬに明くる短夜

朝顔

東くめ子

日の影にあてじと覆ふ袖垣の

ひまよりにほふ花の朝顔

水郷

須川ゆき子

夕風に岸邊の柳うちなびく

影もすゝしき川つらの里